

## 研究員紹介

### 小川滋之准教授

#### 小川滋之

2023年4月、ふじのくに地球環境史ミュージアムに着任した小川滋之です。植物に関わる地理学が専門であり、森林の樹木から在来作物の野菜まで広く研究対象にしています。ミュージアムでは、南アルプス地域のフィールド科学を担当しており、喫緊の課題は、井川集落に残る在来作物を把握することと考えております。在来作物とは、特定の地域で種がつながれ、古くから生活に利用されてきた作物のことです。井川集落では、栽培される方の減少や高齢化により、数年前までは存在した作物が人知れず絶滅したという話をよく耳にします。他地域では、在来作物の絶滅によって、密接に関係した郷土料理や伝統文化なども失われる事例があります。私は、井川集落の在来作物を研究し、将来的には保全していく方法や新たな活用の方法を検討していく予定です。

さて、私の研究について少しお話しします。基本はフィールドワークです。学部では地理学を専攻し、水文地形学研究室で分布下限付近のブナの分布が基盤岩に規定されているという卒業論文を書きました。学部生のことは、分野関係なく知り合いの面白そうな現地調査によく参加していました。大学院では、自然植生について深く学びたいと考え、千葉大学の沖津進先生に師事しました。私自身、中学から大学まで陸上競技部に所属しており、野山を走りまわっておりましたのでフィールドの移動はまったく苦になりませんでした。それに加えて、沖津先生はローテクノロジーフィールドワークをモットーにされており、現地を観察することの重要性を学ばせていただきました。研究では、カバノキ林の形成される立地環境と維持機構に関する内容で学位を取得しましたが、現地調査では地形図を広げて等高線の間隔からカバノキ属樹木が分布する地形を見つける、現地に行く、探すということをくり返しておりました。道なき道を歩き、崖を登り、クマの親子と鉢合わせ、猟師に銃口を向けられたこともありました。今では、



写真1 本部町立博物館（沖縄県）の植物観察会で解説を担当。



写真2 セルフリフォームしている古民家の庭先で在来作物を栽培。

天候の変化よりも野生動物よりも人間の方がよっぽど恐ろしいという話のネタになっています。

博士号取得後は、沖縄県の本部町立博物館、千葉大学、静岡大学などに勤務しました。国内外様々な地域を訪れ、人々と出会い、研究する機会、業務に携わる機会をいただき、フィールドワークの意味も少し変わりました。「私は、その地域のために何ができるのか？」と考えるようになりました。在来作物に関する研究は、本部町立博物館に来館された方に「植物担当なら野菜もわかる？」と聞かれたことがきっかけです。そういう需要があるのなら研究しようということで、現在では畑で野菜を育てることもフィールドワークの一部に加わりました。このように私の研究はフィールドワークが基本です。今後もフィールドワークから静岡県の研究を行っていきたいと考えております。